

# 介護学生の自我意識と 自我意識形成に影響を及ぼす要因について

Factors affecting self-consciousness of care students

八木裕子  
YAGI Yuko

## 要旨

【目的】本研究の目的は、介護職を目指す学生の自我意識の特徴を知り、自我意識の形成にどのような要因が影響を及ぼしているのかについて明らかにすることである。

【方法】四年制大学で学んでいる介護福祉士を目指す学生と近接領域で、対人関係職である社会福祉士、看護師を目指す学生に対して、質問紙による集合調査を行い、580名（有効回答率100%）の学生より回答を得た。

【結果】介護職を目指す学生の特徴としては、“自分に自信が無く、自己評価が低めである”“体力には自信があり、得意なスポーツがある”“慎重・繊細なタイプで、落ち着きがある”傾向であった。このような自我意識の形成要因として、属性は第一子（長男・長女）が多く、祖父母との高い同居率、母親の仕事が“福祉・介護職”であり、母親の深い関わり方やのんびりした性格も影響していることが示唆された。

【結論】介護学生の自我意識の特徴として、体力には自信はあるが、自己評価は低めである。これはデメリットのように捉えられがちであるが、この「自信の低さ」は、慎重で落ち着いた傾向があり、自分よりも他人の事を考えられ、人間関係の構築がスムーズにできる可能性を持ち合わせていると解釈することができる。“自分に自信が無く、自己評価が低め”こそが、今後介護福祉士を目指す学生が、大きく成長する要因ではないかと考えられる。

キーワード：自我意識 自己評価 介護福祉士

## はじめに

1987年に社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、介護福祉士は国家資格をもつ専門職として社会的に認知されてきた。その介護福祉士養成教育は、現在、福祉系四年制大学、短期大学、専門学校等で広く行なわれている。養成校での教育は、質の高い介護福祉士の養成を目指し、講義、演習、実習を通し、人間の尊厳と自立、自己決定権の尊重といったカリキュラムが組まれている。また、近年後期高齢者の急激な増加に伴って、認知症高齢者の介護や医療依存度の高い高齢者も増えて続けており、これらの状況に対応できる専門職としての介護福祉士の養成が求められている。

その介護職の適性として、以前、(株)リクルートが介護職の活躍人材のSPI2を(採用選考の場面で多くの企業に活用されている適性検査)調べた結果、SPI2の代表的な6タイプの中の一つの「慎重・繊細タイプ」と傾向(波形)がほぼ一致した。その内容は「周囲に対して思いやりがある」「控えめでやさしい」「慎重で細かいことによく気がつく」「じっくり物事に取り組む方だ」などが挙げられている<sup>1)</sup>。このようなことから、世間では「介護や福祉を目指してくる学生は優しく、世話好きな性格の“いい人”が多い」と思われている。

また介護労働者の就業意識調査(介護労働安定センター、2014)では、仕事の選択理由として「働きがいのある仕事だと思ったから」(52.6%)との回答が最も高いことが明らかになっている。それに加え「お年寄りが好きだから」(25.6%)との内面的な感情による回答が4分の1を占め、仕事にやりがいや満足感を抱え、介護の仕事を「働き続けられる限り働きたい」と就労継続意欲をもつ介護職員の姿が浮かび上がっている。

しかし、一方で介護職員の年間離職率が16.5%で、他の産業と比較して離職率は群を抜いて高いわけではないが、非正規職員の離職率は22.6%と、雇用形態によっては高い水準にある。また、退職の理由についても「職場の人間関係への不満」(26.6%)、「法人や施設事業所の理念や運営方針への不満」(22.7%)が多かったことも明らかにされている。

また、2006年に施行された『高齢者虐待防止法』が施行されたにも関わらず、養護者(高齢者を現に養護する者)は然ることながら、養介護施設従事者、いわゆる介護職による虐待行為が後を絶たない。李<sup>2)</sup>の調査によると、社会福祉施設での高齢者虐待について、特別養護老人ホームで、介護職によるものが最も多いという結果である。具体的には、高齢者が反発すると「あんた一人に構ってられない」などのひどい言い方をする、オムツ交換時に「よく出るなあ」などとプライバシーを侵害するような内容が目立ち、「してあげている」という言葉などが出やすいとされている。

同年の「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果」(厚生労働省)によると、虐待の発生要因として「知識・技術に関する問題」(55.3%)「ストレス」(29.8%)などに続き「虐待を行った職員の性格や資質」(28.4%)という個人の内面的要因も挙げられている。

高齢者虐待の要因として山田<sup>3)</sup>は労働環境や養成ルート、教育訓練、職場・組織の問題を挙げている。また李<sup>4)</sup>は、施設の形態や機能を規定し管理している現在の高齢者福祉の法・制度等としている。しかし介護職の適性が「優しさ」や「思いやりがある」と思われる一方で、介護現場では、介護職が労働目的とは相対立する虐待や殺人行為に及んでいる現実がある。このことから“いい人”と思

われる傾向が強い介護職が、このような虐待や離職を繰り返すには、まわりの環境等の外的要因と性格や特性等の内的要因が影響しているのではないかと考えた。

筆者は、20数年、介護福祉士養成に携わり、介護福祉現場に介護福祉士を多く輩出する一方、訪問介護員として勤務経験をもつ中で、介護ニーズが高い利用者やその家族の期待に対し、懸命に応えようとする介護福祉士の姿を多くみてきた。そこには、人間関係や事業所との理念の違いに悩む卒業生や同僚も存在したが、介護の仕事に対してやりがいや満足感を抱き、モチベーションも高く、生き生きと業務に励む介護職員の姿が数多くみられた。

この経験から、介護職員の特性を知り、そこから現在の仕事に対するモチベーションを支えている要因を明らかにし、それを支援することで虐待や離職を避けられる可能性があるのではないかと考えた。

そこで今回の研究の目的は、介護職の「性格や資質」という個人的要因に着目するために、まず、介護職を目指そうとする者の自我意識に何らかの特徴が示されるのかを調査し、自我意識の形成にどのような要因が影響を及ぼしているのかを知ることである。最終的には、介護職員の自我意識の検証を行い、その自我意識が介護現場でどのように変化するのか、その変化に関する要因を明らかにし、介護職員が力を発揮し、意欲的に介護業務を遂行するための支援の方向とその可能性について検討する予定である。

今後の要介護高齢者の増大に伴い、介護業界にとって、介護職員の質の高い人材が求められ、介護職離れ抑制の問題は重要な課題である。だからこそ、『「いい人」であったはずの介護職が、なぜ離職や虐待を引き起こすのか』という批判にさらされることのないよう、ここでは彼らの内的な部分、いわゆる自我意識に焦点をあてていく。

ここでいう自我意識とは、Karl Jaspersによる「自分自身を認識する意識」<sup>5)</sup>とする。いわゆる「自分が生きていること」や、「自分が存在していること」を認識する意識のことで、自分の中の自分をどのように意識しているのか、自分のことを冷静に見ることができるかということである。この意識がしっかりしている人物は、「相手の立場に立って物事を考える」ことができるのではないかと考える。

## I. 研究方法

### 1. 対象

本調査は、四年制大学で学んでいる学生に対して質問紙調査を行った。調査対象地域は、筆者が依頼可能な関東圏内にある介護福祉士を目指す大学4校と近接領域で、対人関係職である社会福祉士を目指す大学2校、そして北海道と中国地方にある看護師を目指す大学2校の協力を仰いだ。調査票は無記名自記式とし、集合調査を行い、その場で回収を行う場合と、留置し後日回収を行った。

有効回答数は580名（有効回答率100%）で、所属ごとでは、介護福祉系（介護福祉士を主に目指す学生）が228名、社会福祉系（社会福祉士を主に目指す学生）が213名、看護系（看護師を主に目指す学生）が228名であった。調査期間は、2014年10月～11月とした。

## 2. 調査内容

質問項目は16項目(4件法、3択、自由記載の混合)で属性、祖父母との同居の有無、両親の職業、両親の性格と関わりの頻度、自我意識、いじめの有無、いじめによる自我意識の影響度、介護職の適性(性格)等とした。

自我意識に関して検討するに当たり、まず、山本真理子・松井豊・山城由紀子<sup>6)</sup>によって作成され、信頼性・妥当性の検証されている、自己の11側面に関する意識を測定する尺度を参考にした。山本らは、大学生を対象に、全体的自己評価の高低が自己認知のどの部分に強く関連しているのかを明らかにするために、自己認知の諸職面の構造を検討するとともに、自己評価との関連を分析した。

本尺度はこの分析の際に開発された、11の側面ごとに個人が自己をどのようにとらえているか自己認知のあり方を測定するものである。それを参考にし、11の側面から今回の調査に必要な10項目を選定し、各因子に負荷量が高い項目を2項目ずつ選び、ここでは、自我意識を測定する尺度項目とした。

次に、自我意識の形成に影響を及ぼす要因で、過去のいじめの体験が、なんらかの自我意識の形成に影響があるのではないかと考えた。ここでのいじめの影響に関する尺度については、香取<sup>7)</sup>によって開発されたものを使用した。過去のいじめにおける役割ごとに、いじめの体験がその後の自分自身にどのように影響を与えているのかを測定する尺度である。下位尺度として、①情緒的不適応②他者尊重③同調傾向④他者評価への過敏⑤精神的強さ⑥進路選択への影響の6つが挙げられている。本尺度の特徴は、いじめられたことを調べるのではなく、その後の影響を調べ、いじめられた人間だけではなく、いじめに関わる役割ごとに、その影響を調べることができるところに面白さがある。この尺度も信頼性・妥当性の検証されており、ここでも挙げられた6つの因子からそれぞれ2～3項目ずつ選び、本調査のいじめの影響を測定する尺度とした。

最後に、性格についての尺度であるが、(株)リクルートがSPI2を、有料老人ホームの介護職へのアンケートを実施した結果、タイプ別に分けると、介護職の活躍人材は、【慎重・繊細タイプ】と傾向がほぼ一致していることがわかった。

【慎重・繊細タイプ】とは、①周囲に対して思いやりがある②控えめでやさしい③慎重で細かいことによく気がつく④欲がなく控えめ⑤気が弱く敏感で傷つきやすい⑥物事を悲観的に考えやすい⑦些細なことでもよくよする、である。門野<sup>8)</sup>は、内面の繊細さは、意外に表面にあらわれないこともあり、まじめでそつのない存在となる。しかし、その真面目さから、考えすぎて落ち込むこともあり、物事へ向かう意欲を失う恐れもある。対人面に関しては、周囲と狭く深くコミュニケーションを取るタイプで、行動面では腰の重い印象を与えることもあると述べている。

このことから、介護職に向いている性格を調べることで、いじめの影響と自我意識との関連性をみることができるのではないかと考え、【慎重・繊細タイプ】の項目を、介護職の適性を測る尺度として、4件法でたずねた。

## 3. 分析方法

属性、自我意識、いじめの有無、いじめの自我意識への影響、性格について単純集計を行い、それぞれの項目を $\chi^2$ 検定で分析した。また自我意識やいじめの影響の特徴を明らかにするため、それぞれ

れプロマックス回転を伴う主因子法因子分析を行い、固有値1.00以上を採用し、共通性の低い項目を削除し、因子負荷量0.4以上を基準に項目の選定を行い、因子構造を確定した。抽出された各因子はCronbach'  $\alpha$  係数を算出して信頼性を確認し、0.7以上を信頼性（内的一貫性）が高いと判断した。

次に、信頼性が確認できた因子を得点化し、各因子の得点を平均値で2分化し、基本属性との関連関係を分析するために、クロス集計、 $\chi^2$  検定を用いた。

その後Kruskal-Wallisの一元配置の分散分析（ANOVA）を使用して、グループ間の分布を検定した。

なお、調査結果分析には、統計ソフトIBM SPSS-Ver.22を用いた。

#### 4. 倫理的配慮

東洋大学倫理委員会の承認を得て調査を実施した。調査に先立って調査内容および起こり得る結果、匿名性とプライバシー遵守について調査依頼文に明記し、調査票回答をもって調査依頼事項への同意とみなした。また、個人情報保護法に基づき、本調査に係る個人情報の安全管理を十分に図った。

## II. 研究結果

### 1. 基本属性

回答者の個人属性は表1に示す。性別は男性140名（24.1%）、女性436名（75.2%）と、圧倒的に女性が多かった。しかし、所属とクロスさせると、社会福祉系と介護福祉系は、男性の割合が多い。年齢に関しては平均値が $20.16 \pm 3.93$ （最小値18.0、最大値61.0）であった。所属（学科別）は、介護福祉士を将来希望している学生がいる介護福祉系は228名（39.3%）、社会福祉士を希望している学生が中心の社会福祉系は213名（36.7%）、看護師を将来希望している学生がいる看護系は228名（24.0%）であった。兄弟姉妹の数としては、一人っ子が59名（10.2%）、2人兄弟姉妹が287名（49.7%）で、ほぼ半数を占める。続柄は長男が104名（17.9%）、長女が298名（51.4%）で半数以上を占めた。祖父母の有無は、どちらもいる・どちらかがいるのは、538名（92.8%）である。同居に関しては、同居していないのが、323名（55.7%）であった。祖父母との関わりは、半年に1度に会うのが165名（29.4%）、1ヶ月に1～2回程度が116名（20.0%）であった。父親も母親も健在で、どちらも9割以上であった。父親の職業は、会社員288名（49.7%）が最も多く、母親の職業はその他としてのパートが多かった。父親の関わりでは“普通（279名、48.1%）”が多いに対し、母親との関わりは“関わりが深い”が397名（68.4%）で、最も多かった。父親、母親の性格は、大きな差はあまりないが、どちらも“おだやか”が多かった。

### 2. 自我意識に関する分析

自我意識については、前述のとおり、“自己の11側面に関する意識を測定する尺度”を参考に27項目を作成し、4件法で回答を求めた。回答状況は表2のとおりである。

表1 回答者の基本的属性

項目	カテゴリー	全数	%			
所属	社会福祉系	213	36.7			
	介護福祉系	228	39.3			
	看護系	139	24.0			
		580	100	社会福祉系	介護福祉系	看護系
性別	男性	140	24.3	56 (40.0%)	66 (47.1%)	18 (12.9%)
	女性	436	75.7	155 (35.6%)	161 (36.9%)	120 (27.5%)
年齢	18歳	103	17.8	49 (47.6%)	38 (36.9%)	16 (15.5%)
	19歳	204	35.2	84 (41.2%)	68 (33.3%)	52 (25.5%)
	20歳	133	22.9	17 (12.8%)	62 (46.6%)	54 (40.6%)
	21歳	60	10.3	18 (30.0%)	38 (63.3%)	4 (6.7%)
	22歳	48	8.3	25 (52.1%)	20 (41.7%)	3 (6.3%)
	23~29歳	13	2.2	10 (76.9%)	0 (0.0%)	3 (23.1%)
	30歳以上	12	2.1	6 (54.5%)	1 (9.0%)	4 (36.5%)
きょうだいの数 (※自分を含まず)	0人	59	10.2	21 (35.6%)	27 (45.8%)	11 (18.6%)
	1人	287	49.7	119 (41.5%)	95 (33.1%)	73 (25.4%)
	2人	170	29.5	56 (32.9%)	77 (45.3%)	37 (21.8%)
	3人	54	9.4	16 (29.6%)	24 (44.4%)	14 (25.9%)
	4人以上	7	0.7	1 (14.3%)	4 (57.1%)	2 (29.5%)
続柄	長男	104	17.9	43 (41.3%)	48 (46.2%)	13 (12.5%)
	長女	298	51.4	108 (36.2%)	104 (34.9%)	86 (28.9%)
	次男	31	5.3	12 (38.7%)	14 (45.2%)	5 (16.1%)
	次女	113	19.5	38 (33.6%)	46 (40.7%)	29 (25.7%)
	三男以上	11	2.0	4 (36.4%)	6 (54.6%)	1 (9.0%)
	三女以上	20	3.4	8 (40.0%)	9 (45.0%)	3 (15.0%)
祖父母の有益	健全	538	92.8	194 (36.1%)	213 (39.6%)	131 (24.3%)
	どちらもない	40	6.9	19 (47.5%)	14 (35.0%)	7 (17.5%)
祖父母との同居の有無	同居している	105	18.1	24 (22.9%)	58 (55.2%)	23 (21.9%)
	同居していない	323	55.7	122 (37.8%)	116 (35.9%)	85 (26.3%)
	過去にしていた	80	13.8	39 (48.8%)	27 (33.8%)	14 (17.5%)
	二世帯世帯	18	3.1	2 (11.1%)	8 (44.4%)	8 (44.4%)
	同居の予定がある	3	0.5	2 (66.7%)	0 (0.0%)	1 (33.3%)
	その他	8	1.4	5 (62.5%)	3 (37.5%)	0 (0.0%)
祖父母とのかかわり	ほぼ毎日ある	99	17.1	21 (21.2%)	59 (59.6%)	19 (19.2%)
	1週間に3~4回	12	2.1	2 (16.7%)	6 (50.0%)	4 (33.3%)
	1週間に1~2回	30	5.2	9 (30.0%)	11 (36.7%)	10 (33.3%)
	1ヶ月に1~2回	116	20.0	41 (35.3%)	44 (37.9%)	31 (26.7%)
	半年に1回	165	29.4	78 (47.3%)	47 (28.5%)	40 (24.2%)
	1年に1回	57	9.8	16 (28.1%)	23 (40.4%)	18 (31.6%)
	数年に1回	27	4.7	13 (48.1%)	9 (33.3%)	5 (18.5%)
	ほとんどない	14	2.4	5 (35.7%)	7 (50.0%)	2 (14.3%)
	その他	10	1.7	7 (70.0%)	2 (20.0%)	1 (10.0%)

項目	カテゴリー	全数	%			
所属	社会福祉系	213	36.7			
	介護福祉系	228	39.3			
	看護系	139	24.0			
		580	100	社会福祉系	介護福祉系	看護系
父親が健在	はい	539	92.9	201 (37.3%)	214 (39.7%)	124 (23.0%)
	いいえ	39	6.7	12 (30.8%)	12 (30.8%)	15 (38.5%)
母親が健在	はい	564	97.2	209 (37.1%)	222 (39.4%)	133 (23.6%)
	いいえ	14	2.4	4 (28.6%)	4 (28.6%)	6 (42.9%)
どちらもいない	はい	4	0.7	2 (50.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)
	いいえ	574	99.0	211 (36.8%)	225 (39.2%)	138 (24.0%)
父親の職業	会社員	288	49.7	105 (36.5%)	115 (39.9%)	68 (23.6%)
	自営業	61	10.5	26 (42.6%)	25 (41.0%)	10 (16.4%)
	農業	9	1.6	5 (55.6%)	1 (11.1%)	3 (33.3%)
	公務員	76	13.1	29 (38.2%)	31 (40.8%)	16 (21.1%)
	教員	17	2.9	4 (23.5%)	7 (41.2%)	6 (35.3%)
	福祉・介護職	19	3.3	7 (36.8%)	6 (31.6%)	6 (31.6%)
	保健・医療職	20	3.4	6 (30.0%)	7 (35.0%)	7 (35.0%)
	無職	13	2.2	7 (53.8%)	4 (30.8%)	2 (15.4%)
	その他	18	3.1	9 (50.0%)	6 (33.3%)	3 (16.7%)
	わからない	14	2.4	2 (14.3%)	11 (78.6%)	1 (7.1%)
母親の職業	会社員	81	14.0	27 (33.3%)	32 (39.5%)	22 (27.2%)
	自営業	36	6.2	14 (38.9%)	13 (36.1%)	9 (25.0%)
	農業	5	0.9	3 (60.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)
	公務員	30	5.2	13 (43.3%)	14 (46.7%)	3 (10.0%)
	教員	21	3.6	9 (42.9%)	10 (46.7%)	2 (9.5%)
	福祉・介護職	78	13.4	40 (51.3%)	26 (33.3%)	12 (15.4%)
	保健・医療職	62	10.7	17 (27.4%)	13 (21.0%)	32 (51.6%)
	無職（専業主婦）	122	21	42 (34.4%)	52 (42.6%)	28 (23.0%)
	その他	96	16.6	39 (40.6%)	44 (45.8%)	13 (13.5%)
	わからない	10	1.7	3 (30.0%)	6 (60.0%)	1 (10.0%)
父親との関わり	関わりが深い	192	33.1	75 (39.1%)	79 (41.1%)	38 (19.8%)
	普通	279	48.1	102 (36.6%)	109 (39.1%)	68 (24.4%)
	あまり関わりがない	78	13.4	27 (34.6%)	32 (41.0%)	19 (24.4%)
父親の性格	短気	212	36.6	69 (32.5%)	90 (42.5%)	53 (25.0%)
	のんびり	92	15.9	38 (41.3%)	36 (39.1%)	18 (19.6%)
	おだやか	230	39.7	88 (38.3%)	92 (40.0%)	50 (21.7%)
母親との関わり	関わりが深い	397	68.4	145 (36.5%)	155 (39.0%)	97 (24.4%)
	普通	163	28.1	60 (36.8%)	65 (39.9%)	38 (23.3%)
	あまり関わりがない	11	1.9	5 (45.5%)	6 (54.5%)	0 (0.0%)
母親の性格	短気	158	27.2	59 (37.3%)	59 (37.3%)	40 (25.3%)
	のんびり	122	26.7	49 (31.6%)	69 (44.5%)	37 (23.9%)
	おだやか	234	40.3	87 (37.2%)	95 (40.6%)	52 (22.2%)

表2 自我意識の回答結果

項目		かなり あてはまる	少し あてはまる	あまりあて はまらない	全くあては まらない	合計
1	人に対して思いやりがある	度数 105 % 2.8	390 11.7	68 67.4	16 18.1	579 100
2	自分の生き方に自信がある	度数 47 % 15.4	188 43.9	254 32.5	89 8.1	578 100
3	交際範囲が広い	度数 54 % 9.3	175 30.3	277 47.9	72 12.5	578 100
4	個性的な生き方をしている	度数 75 % 13.0	180 31.1	256 44.3	67 11.6	578 100
5	特技がある	度数 70 % 12.1	198 34.2	222 38.3	89 15.4	579 100
6	自分に厳しい	度数 41 % 7.1	164 28.4	292 50.5	81 14	578 100
7	社交能力に自信がある	度数 46 % 8.0	171 29.6	244 42.2	117 20.2	578 100
8	きちょうめんな性格である	度数 65 % 11.2	204 35.2	221 38.2	89 15.4	579 100
9	家庭が裕福である	度数 32 % 5.5	219 37.8	246 42.5	82 14.2	579 100
10	運動神経が発達している	度数 39 % 6.7	156 26.9	247 42.7	137 23.7	579 100
11	人に関して寛大である	度数 84 % 14.5	280 48.4	176 30.4	39 6.7	579 100
12	出身校が有名である	度数 46 % 7.9	148 25.6	211 36.4	174 3.1	579 100
13	趣味・特技に自信がある	度数 61 % 10.5	145 25	269 46.5	104 18	579 100
14	知的能力に自信がある	度数 13 % 2.3	99 17.2	303 52.5	162 28.1	577 100
15	自由に使えるお金が多い	度数 35 % 6.0	166 28.7	278 48	100 17.3	579 100
16	体力・運動能力に自信がある	度数 36 % 6.2	151 26.2	235 40.7	155 26.9	577 100
17	社会的に評判のよい大学に在籍している	度数 64 % 11.1	289 50.2	185 32.1	38 6.6	576 100
18	経済的な面で自信がある	度数 11 % 1.9	83 14.3	313 54.0	165 28.4	572 100
19	いろいろな人と気楽に話せる	度数 66 % 11.5	204 35.7	224 39.2	78 13.6	572 100
20	得意なスポーツがある	度数 106 % 18.5	208 36.4	148 25.9	11 19.2	572 100
21	頭の回転が速い	度数 29 % 5.1	122 21.3	294 51.3	128 22.3	573 100
22	おおらかな人柄である	度数 75 % 13.1	286 50.1	170 29.8	40 7.0	571 100
23	自分に自信がある	度数 21 % 3.7	103 18	278 48.6	170 19.7	572 100
24	人よりいろいろなことをよく知っている	度数 16 % 2.8	119 20.8	293 51.2	144 25.2	572 100
25	熱中している趣味がある	度数 158 % 27.6	169 29.5	177 30.9	69 12	573 100
26	責任感が強い	度数 91 % 15.9	285 49.7	161 28.1	36 6.3	573 100
27	家や大学などの社会的背景に自信がある	度数 18 % 3.1	156 27.3	300 52.4	98 17.1	572 100

表3 大学生の自我意識の因子分析結果

(KMO=.870)

質問項目	因子				共通性
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
<b>【第1因子】優越意識 (<math>\alpha=0.827</math>)</b>					
14 知的能力に自信がある	.771	-.014	-.052	-.048	0.571
21 頭の回転が速い	.741	.077	-.022	-.019	0.582
24 人よりいろいろなことをよく知っている	.729	-.012	-.021	-.026	0.482
23 自分に自信がある	.693	-.013	.027	.075	0.631
2 自分の生き方に自信がある	.511	-.042	.175	.066	0.469
<b>【第2因子】スポーツ能力 (<math>\alpha=0.864</math>)</b>					
10 運動神経が発達している	-.028	.928	.012	-.016	0.844
16 体力・運動能力に自信がある	.009	.873	-.021	-.011	0.752
20 得意なスポーツがある	.025	.682	.024	.049	0.544
<b>【第3因子】社交性 (<math>\alpha=0.814</math>)</b>					
7 社交能力に自信がある	.049	.002	.854	-.074	0.722
19 いろいろな人と気楽に話せる	-.079	-.019	.807	.086	0.655
3 交際範囲が広い	.046	.036	.658	-.026	0.485
<b>【第4因子】寛容性 (<math>\alpha=0.803</math>)</b>					
22 おおらかな人柄である	.011	-.012	-.037	.901	0.736
11 人に関して寛大である	-.010	.031	.033	.747	0.608
固有値	5.031	1.710	1.357	1.206	累積 60.47

この27項目について「かなりあてはまる」「少しあてはまる」の割合からみると、「人に対して思いやりがある」「自分の生き方に自信がある」「社会的に評判のよい大学に在籍している」「得意なスポーツがある」「おおらかな人柄である」「熱中している趣味がある」「責任感が強い」が高く、全体的に「運動神経が発達している」「知的能力に自信がある」「経済的な面で自信がある」「頭の回転が速い」「自分に自信がある」「家や大学などの社会的背景に自信がある」という項目の割合は低いという特徴を示している。

次に、27項目の分布の偏りについて検討し、天井効果及びフロア効果が認められる項目がみられないため、この項目の傾向を把握するため、27項目すべてを投入した探索的因子分析を行い、内的一貫性をより高めるため因子負荷量がどの因子においても0.4未満の項目を削除し、繰り返し因子分析を行った。その結果、表3に示すように14項目を除く計13項目から構成された4因子が抽出された。

第1因子は「知的能力に自信がある」「人よりもいろいろなことをよく知っている」など、他人と自分との比較がみられることから「優越意識」、第2因子は「運動神経が発達している」「得意なスポーツがある」とのことから「スポーツ能力」、第3因子は「社交能力に自信がある」「交際範囲が広い」とのことから「社交性」、第4因子は「おおらかな人柄である」「人に関して寛大である」とのことから「寛容性」とそれぞれ命名した。

各因子の尺度としての信頼性を検定した後、得点化した。信頼度係数（Cronbach  $\alpha$  係数）は全て0.8以上あり、尺度として十分な信頼性（内的一貫性）が示された。

### 3. いじめの体験に関する分析

ここでは、過去のいじめにおける立場ごとに、いじめの体験がその後どのように影響しているかについて、プラスとマイナスの両側面から検討している。

表4 いじめの有無に関する回答

		度数	%	有効%
有効数	あり	423	72.9	73.2
	なし	155	26.7	26.8
	合計	578	99.7	100.0
欠損値	無回答	2	.3	
合計		580	100.0	

表5 いじめの立場に関する回答

		度数	%	有効%
有効数	被害者	98	16.9	25.2
	加害者	15	2.6	3.9
	被害者かつ加害者	70	12.1	18.0
	傍観者	143	24.7	36.8
	観衆	35	6.0	9.0
	仲裁者	28	4.8	7.2
	合計	389	67.1	100.0
欠損値	その他	9	1.6	
	非該当	155	26.7	
	無回答	27	4.7	
	合計	191	32.9	
合計		580	100.0	

いじめ体験の有無とその立場についての人数について表4・5に示した。

いじめること、いじめられること、いじめを見ること等を含めて体験したことがあると答えた学生は、7割にのぼった。また、いじめに対して、どのような立場であったかとの問いに対して、傍観者の割合が最も多く、ついで被害者という結果であった。

ここでいう「傍観者」は、いじめを見ながらも知らぬふりを装っている状態で、「観衆」は、自分で直接手は下していないが、まわりで面白がったり、はやし立てたりすることの意味である。

いじめの影響尺度については、先行研究（香取，1998）を参考に、尺度17項目を作成し、4件法で回答を求めた。回答状況は表6のとおりである。

この17項目について「かなりあてはまる」「少しあてはまる」の割合からみると、“イライラしやすくなった”“大学の志望学部に影響を与えた”が高く、“人間的に成長した”“我慢強くなった”“人からどのように思われているのか気になるようになった”についての割合は低い。

いじめの影響の尺度についても、17項目すべてを投入した探索的因子分析を行い、内的一貫性をより高めるため因子負荷量がどの因子においても0.4未満の項目を削除し、繰り返し因子分析を行った。その結果、表7に示すように5項目を除く計12項目から構成された3因子が抽出された。

第1因子は“人からどのように思われているのか気になるようになった”“人の態度に敏感になった”など、他者からの評価を気にすることから「他者評価の過敏」、第2因子は“精神的に強くなった”“我慢強くなった”とのことから「精神的強さ」、第3因子は“将来の職業選択”“大学志望学部に影響した”とのことから「進路への影響」、とそれぞれ命名した。各因子の尺度としての信頼性を検定し

表6 いじめが与える影響についての回答

項目			かなり	少し	あまりあて	全くあては	合計
			あてはまる	あてはまる	はまらない	まらない	
1	イライラしやすくなった	度数	105	390	68	16	579
		%	2.8	11.7	67.4	18.1	100
2	みんなと同じようにしようと思うようになった	度数	47	188	254	89	578
		%	15.4	43.9	32.5	8.1	100
3	嫌われないよう人に気をつかうようになった	度数	54	175	277	72	578
		%	9.3	30.3	47.9	12.5	100
4	将来の職業選択に影響を与えた	度数	75	180	256	67	578
		%	13.0	31.1	44.3	11.6	100
5	よく眠れなくなった	度数	70	198	222	89	579
		%	12.1	34.2	38.3	15.4	100
6	自分の気持ちや考えを相手に適切に伝える努力をするようになった	度数	41	164	292	81	578
		%	7.1	28.4	50.5	14	100
7	精神的に強くなった	度数	46	171	244	117	578
		%	8.0	29.6	42.2	20.2	100
8	目立たないようにしようと思うようになった	度数	65	204	221	89	579
		%	11.2	35.2	38.2	15.4	100
9	自分の考えや意見を言うのを抑えるようになった	度数	32	219	246	82	579
		%	5.5	37.8	42.5	14.2	100
10	人に思いやりをもって接するようになった	度数	39	156	247	137	579
		%	6.7	26.9	42.7	23.7	100
11	人の態度に敏感になった	度数	84	28	176	39	579
		%	14.5	4.8	30.4	6.7	100
12	人からどのように思われているのか気になるようになった	度数	46	148	211	174	579
		%	7.9	25.6	36.4	3.1	100
13	何もしたくないと思うようになった	度数	61	145	269	104	579
		%	10.5	25	46.5	18	100
14	人間的に成長した	度数	13	99	303	162	577
		%	2.3	17.2	52.5	28.1	100
15	相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった	度数	35	166	278	100	579
		%	6.0	28.7	48	17.3	100
16	我慢強くなった	度数	36	151	235	155	577
		%	6.2	26.2	40.7	26.9	100
17	大学の志望学部に影響を与えた	度数	64	289	185	38	576
		%	11.1	50.2	32.1	6.6	100

た後、得点化した。各因子の尺度としての信頼性を検定した後、得点化した。信頼度係数 (Cronbach  $\alpha$  係数) はそれぞれ0.7以上あり、尺度として十分な信頼性 (内的一貫性) が得られた。

#### 4. 性格に関する分析

性格については、前述のとおり、(株) リクルートのSPI 2からの結果を参考に11項目を作成し、4件法で回答を求めた。

回答状況は表8のとおりである。

この11項目について「かなりあてはまる」「少しあてはまる」の割合からみると、“人の態度や言葉が気になる方だ” “思ったことが素直に表情に出やすい” “現実を受け入れる方だ” の割合が高く、“あまり物事を深く考えない方だ” “あまり浮ついたところがなく、感情を気軽に出さず、落ち着いている方だ” についての割合は低い。

前述の2つの尺度と同じように、因子分析を行った結果、尺度としての信頼性がとれなかったた

表7 大学生のいじめが与える影響に関する因子分析結果

(KMO=.827)

質問項目	因子			
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
<b>【第1因子】 他者評価の過敏 (<math>\alpha=0.754</math>)</b>				
12 人からどのように思われているのか気になるようになった	.764	.067	-.125	0.602
9 自分の考えや意見を言うのを抑えるようになった	.758	-.112	.080	0.552
8 目立たないようにしようと思うようになった	.742	-.171	.134	0.534
3 嫌われないよう人に気をつかうようになった	.725	-.027	-.015	0.511
11 人の態度に敏感になった	.674	.289	-.080	0.644
<b>【第2因子】 精神的強さ (<math>\alpha=0.815</math>)</b>				
14 人間的に成長した	-.142	.816	.026	0.621
16 我慢強くなった	.031	.743	-.023	0.559
7 精神的に強くなった	-.183	.705	.025	0.454
10 人に思いやりをもって接するようになった	.145	.581	.040	0.430
15 相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった	.169	.566	.039	0.428
<b>【第3因子】 進路への影響 (<math>\alpha=0.809</math>)</b>				
4 将来の職業選択に影響を与えた	.011	.034	.860	0.759
17 大学の志望学部に影響を与えた	.014	.045	.764	0.608
固有値	4.137	2.293	1.505	累積 55.84

表8 性格の項目と所属のクロス表

項目	カテゴリー	社会福祉系	介護福祉系	看護系
1 控えめででしゃばらない方だ	あてはまる	122 (37.7%)	128 (39.5%)	74 (22.8%)
	あてはまらない	88 (34.9%)	99 (39.3%)	65 (25.8%)
2 あまり物事を深く考えない方だ	あてはまる	75 (31.8%)	96 (40.7%)	65 (27.5%)
	あてはまらない	136 (39.9%)	131 (38.4%)	74 (21.7%)
3 じっとしていることを好む	あてはまる	129 (39.7%)	130 (40.0%)	66 (20.3%)
	あてはまらない	81 (32.3%)	97 (38.6%)	73 (29.1%)
4 あっさりしている方だ	あてはまる	96 (33.9%)	116 (41.0%)	71 (25.1%)
	あてはまらない	115 (39.1%)	111 (37.8%)	68 (23.1%)
5 現実を受け入れる方だ	あてはまる	136 (36.0%)	146 (38.6%)	96 (25.4%)
	あてはまらない	75 (37.7%)	81 (40.7%)	43 (21.6%)
6 じっくり物事に取り組む方だ	あてはまる	120 (35.6%)	133 (39.5%)	84 (24.9%)
	あてはまらない	91 (37.9%)	94 (39.2%)	55 (22.9%)
7 人の態度や言葉が気になる方だ	あてはまる	171 (37.0%)	184 (39.8%)	107 (23.2%)
	あてはまらない	39 (34.2%)	43 (37.7%)	32 (28.1%)
8 優しく受容的な方だ	あてはまる	134 (35.8%)	146 (39.0%)	94 (25.1%)
	あてはまらない	76 (37.6%)	81 (40.1%)	45 (22.3%)
9 思ったことが素直に表情に出やすい	あてはまる	149 (35.1%)	173 (40.8%)	102 (24.1%)
	あてはまらない	61 (40.1%)	54 (35.5%)	37 (24.3%)
10 穏やかで寛容的な方だ	あてはまる	146 (38.0%)	154 (40.1%)	84 (21.9%)
	あてはまらない	62 (32.6%)	73 (38.4%)	55 (28.9%)
11 あまり浮ついたところがなく、感情を気軽に に出さず、落ちついている方だ	あてはまる	106 (39.0%)	97 (35.7%)	69 (25.4%)
	あてはまらない	105 (34.4%)	130 (42.6%)	70 (23.0%)

め、尺度として利用できないと判断した。ここでは、項目ごとに「あてはまる」「あてはまらない」を二分化し、属性とクロスさせた。

介護職に向く性格の尺度であるため、上記の表の中で「あてはまる」と選択しているものを所属からみると次の図のとおりであった。全体的に介護福祉士を目指している学生の割合が多く、介護職のみならず、「福祉」という括りで考え、介護福祉系、社会福祉系を含むと、どの項目も8割程度、この性格にあてはまるということがわかった。

5. 自我意識、いじめの体験の因子と基本属性との関連性

5.1 自我意識と基本属性

自我意識の形成の違いが何から影響しているのかを明らかにするために、自我意識に関する各因子を従属変数、基本属性（性別、年齢、所属、両親の関わりや性格、いじめの加害者か被害者）を独立変数として、SPSSによるχ<sup>2</sup>検定を行った。自我意識の因子について、各因子得点を平均値で二分し、得点の高いものを「高得点群」、低いものを「低得点群」として分析し表9では、有意差がわかるように項目を提示した。

また、所属（学科）については、特徴をみるため、各所属（学科）別にグループで比較した。Kruskal-Wallisの一元配置の分散分析（ANOVA）を使用して、グループ間の分布を検定した（表10～表12）。

第1因子の「優越意識」得点と第2因子の「スポーツ能力」得点とでは、グループ間に有意差がみられたが、第3因子の「社交性」と第4因子の「寛容性」ではグループ間に有意差はみられなかった。

表9 自我意識の因子と基本属性とのχ<sup>2</sup>検定

	優越意識（自分に自信がある、人より物知り）	スポーツ能力（運動神経が発達している、体力に自信がある）	社交性（どんな人にも気楽に話せる、交友範囲が広い）	寛容性（おおらかな人柄である、人に関して寛大である）
性別	p=.137	P=.120	p=.803	P=.990
年齢	p=.006**	p=.623	p=.077	P=.993
所属	p=.016*	P=.020*	P=.173	P=.150
続柄	P=.002**	P=.646	p=.077	p=.028*
父親の関わり	p=.774	p=.112	p=.527	p=.097
母親の関わり	p=.951	p=.407	p=.029*	p=.002**
父親の性格	p=.346	p=.340	p=.091	p=.005**
母親の性格	p=.000***	p=.030*	p=.024*	p=.018*

\*:<.05, \*\*<.01, \*\*\*<.001

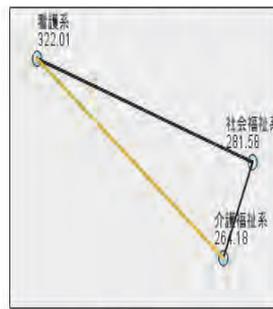
表10 Kruskal-Wallis の検定

仮説検定の要約

	帰無仮説	検定	有意確率	決定
1	社交性得点の分布は所属のカテゴリーで同じです。	独立サンプルによるKruskal-Wallis の検定	.328	帰無仮説を採択します。
2	スポーツ能力得点の分布は所属のカテゴリーで同じです。	独立サンプルによるKruskal-Wallis の検定	.019	帰無仮説を棄却します。
3	寛容性得点の分布は所属のカテゴリーで同じです。	独立サンプルによるKruskal-Wallis の検定	.280	帰無仮説を採択します。
4	優越意識得点の分布は所属のカテゴリーで同じです。	独立サンプルによるKruskal-Wallis の検定	.005	帰無仮説を棄却します。

漸近的な有意確率が表示されます。有意水準は .05です。

表11 自我意識と所属(学科)のペアごとの比較

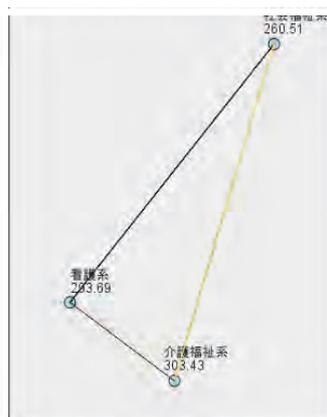


各ノードには所属の平均順位が示されます。

サンプル1-サンプル2	検定統計	標準エラー	標準	検定統計	有意確率	調整済み有意確率
介護福祉系・社会福祉系	17.398	15.724		1.106	.269	.806
介護福祉系・看護系	57.835	17.707		3.266	.001	.003
社会福祉系・看護系	-40.438	17.949		-2.253	.024	.073

各行は、サンプル1とサンプル2の分布が同じであるという帰無仮説を検定します。漸近的な有意確率(両側検定)が表示されます。有意水準は.05です。

表12 自我意識と所属(学科)のペアごとの比較



各ノードには所属の平均順位が示されます。

サンプル1-サンプル2	検定統計	標準エラー	標準	検定統計	有意確率	調整済み有意確率
社会福祉系・看護系	-33.179	17.997		-1.844	.065	.196
社会福祉系・介護福祉系	-42.922	15.721		-2.730	.006	.019
看護系・介護福祉系	-9.743	17.693		-5.51	.582	1.000

各行は、サンプル1とサンプル2の分布が同じであるという帰無仮説を検定します。漸近的な有意確率(両側検定)が表示されます。有意水準は.05です。

## 5.2 いじめの影響の因子と基本属性との関連

いじめが自身に及ぼす影響の違いが何から影響しているのかを明らかにするために、大学生のいじめに関する各因子を従属変数、基本属性(性別、年齢、所属、続柄、両親の関わりや性格)を独立変数として、SPSSによる $\chi^2$ 検定を行った。いじめの影響の因子について、各因子得点を平均値で二分し、得点の高いものを「高得点群」、低いものを「低得点群」として分析し、表13では、有意差がわかるように提示した。

また、所属(学科)については、特徴をみるため、各所属(学科)別にグループで比較した。

表13 いじめの影響と基本属性とのχ<sup>2</sup> 検定

	他者評価の過敏（嫌われないように気をつかう、人の態度に敏感）	精神的強さ（精神的に強くなった、我慢強くなった）	進路への影響（将来の職業選択や大学志望学部に影響した）
性別	P=.394	P=.492	P=.824
年齢	P=.549	p=.253	P=.469
所属	P=.795	P=.486	p=.015*
続柄	p=.264	p=.217	p=.720
父親の関わり	p=.257	p=.141	p=.130
母親の関わり	p=.410	p=.109	P=.920
父親の性格	p=.115	P=.982	p=.723
母親の性格	P=.009**	p=.013*	p=.791

\*,<.05, \*\*<.01, \*\*\*<.001

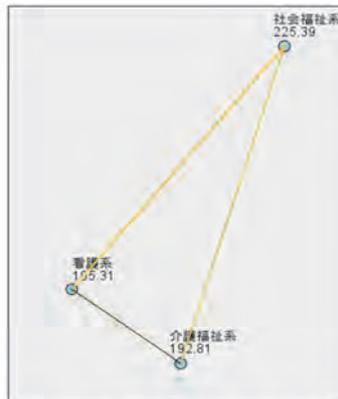
表14 Kruskal-Wallis の検定

仮説検定の要約

	帰無仮説	検定	有意確率	決定
1	他者評価の過敏得点の分布は所属のカテゴリーで同じです。	独立サンプルによるKruskal-Wallis の検定	.794	帰無仮説を採択します。
2	精神的強さ得点の分布は所属のカテゴリーで同じです。	独立サンプルによるKruskal-Wallis の検定	.271	帰無仮説を採択します。
3	進路への影響得点の分布は所属のカテゴリーで同じです。	独立サンプルによるKruskal-Wallis の検定	.009	帰無仮説を棄却します。

漸近的な有意確率が表示されます。有意水準は .05です。

表15 いじめの影響と所属（学科） のペアごとの比較（進路への影響）



各ノードには所属の平均順位が示されます。

サンプル1-サンプル2	検定統計	標準エラー	標準	検定統計	有意確率	調整済み有意確率
看護系・介護福祉系	-7.494	14.994		-5.00	.617	1.000
看護系・社会福祉系	40.078	15.225		2.632	.008	.025
介護福祉系・社会福祉系	32.584	12.643		2.577	.010	.030

各行は、サンプル1とサンプル2の分布が同じであるという帰無仮説を検定します。

漸近的な有意確率（両側検定）が表示されます。有意水準は .05です。

表16 性格と基本属性のχ<sup>2</sup>検定

	項目	性別	年齢	学科	続柄	父親が いる	母親が いる	父親との 関わり	母親との 関わり	父親の 性格	母親の 性格
1	控えめでしゃばらない方だ	p=.375	p=.593	p=.669	p=.214	p=.752	P=.306	p=.602	p=.469	p=.372	p=.056
2	あまり物事を深く考えない方だ	p=.234	p=.060	p=.097	p=.863	p=.177	P=.039*	p=.856	p=.581	p=.569	p=.175
3	じっとしていることを好む	p=.422	p=.729	p=.035*	p=.454	p=.501	P=.622	p=.377	p=.318	p=.736	p=.201
4	あっさりしている方だ	p=.074	p=.800	p=.432	p=.027*	p=.467	P=.035*	p=.295	p=.707	p=.162	p=.379
5	現実を受け入れる方だ	p=.833	p=.452	p=.599	p=.603	p=.823	P=.493	p=.454	p=.883	p=.231	p=.816
6	じっくり物事に取り組む方だ	p=.015*	p=.629	p=.802	p=.525	p=.563	P=.312	p=.055	p=.309	p=.899	p=.242
7	人の態度や言葉が気になる方だ	p=.678	p=.879	p=.545	p=.449	p=.176	P=.132	p=.782	p=.633	p=.831	p=.900
8	優しく受容的な方だ	p=.029*	p=.290	p=.742	p=.451	p=.565	P=.234	p=.227	p=.246	p=.296	p=.210
9	思ったことが素直に表情に出やすい	p=.468	p=.854	p=.459	p=.952	p=.033*	P=.858	p=.267	p=.658	p=.069	p=.904
10	穏やかで寛容的な方だ	p=.836	p=.188	p=.154	p=.308	p=.695	P=.830	p=.515	p=.841	p=.239	p=.094
11	あまり浮ついたところがなく、感情を 気軽に表さず、落ちている方だ	p=.045*	p=.739	p=.231	p=.287	p=.429	P=.159	p=.571	p=.030*	p=.038*	p=.096

\*:<.05, \*\*<.01, \*\*\*<.001

Kruskal-Wallisの一元配置の分散分析 (ANOVA) を使用して、グループ間の分布を検定した (表14・表15)。第3因子の「進路への影響」得点が、グループ間に有意差がみられたが、第1因子の「他者評価の過敏」と第2因子の「精神的強さ」ではグループ間に有意差はなかった。

## 6. 性格と基本属性との関連性

介護職に向いているとされる性格と基本属性が何から影響しているのかを明らかにするために、因子分析は尺度としての信頼性がとれなかったため、尺度として利用できないと判断したことにより、性格についての項目を従属変数、基本属性を独立変数として、SPSSによるχ<sup>2</sup>検定を行った。性格に関しては、「あてはまる」「あてはまらない」の二区分として分析し、表16では、有意差がわかるように提示する。

## Ⅲ. 考察

### 1. 介護福祉士、社会福祉士、看護師を目指す学生の特徴

#### 1.1 属性と所属学科との関連

学生全体の属性は、女性が7割を占め (75.2%)、平均年齢は20.16歳で、圧倒的に女性が多かった。しかし男性の学科別の比率としては、社会福祉系が40.0%、介護福祉系47.1%ということ半数に近く、男性比率が高めであった。このことから、対人関係職 (社会福祉士、介護福祉士、看護師) を目指す学生は女性が多いが、学科によっては、男性の比率が高くなっていることがわかる。また兄弟姉妹の数も2人兄弟姉妹が多く、長男長女の立場の学生が半数以上であることがわかる。

祖父母との同居の有無に関しては、全体としては同居していないこと (55.7%) が多いが、同居していると答えた学生の中では、介護福祉系の学生の比率 (55.2%) が半数以上であった。また祖父母との関わりに「ほぼ毎日ある」と答えた学生の比率は介護福祉系が約6割 (59.6%) であった。

父親、母親に関しては、父親の職業は会社員が半数 (49.7%) を占めていた。母親の職業は全体の

割合的には低いですが、“福祉・介護職”に従事している母親をもつ学生の比率は社会福祉系（51.3%）、介護福祉系（33.3%）と高めであった。母親が“保健・医療職”に従事している学生の割合も看護系（51.6%）と半数以上であった。また父親や母親の性格や関わり方をみると、父親の方はばらつきがあるのに対して、“母親との関わりが深い”としている学生が7割（68.4%）近くに達するという事は、学生は、母親との関わりや職業に影響されている可能性が示唆される。

## 1.2 属性からみる自我意識との関連

自我意識については、各側面に偏りがないよう留意して、27項目の回答を4件法で点数化し、因子分析によって解析したところ「優越意識」「スポーツ能力」「社交性」「寛容性」の4因子が得られた。これは山本の一般の大学生に行った調査と同様の結果が得られており、対人関係職を目指す学生に限ったことではないことがわかる。

### 1.2.1 年齢、所属、続柄による自我意識の相違

「年齢」との関連について、平均年齢20.16歳を基準に大学生年齢の若年層と高年層に二分して分析した。すると第1因子の「優越意識」で有意差が見られ、高年層では得点が有意に高く、若年層では得点が有意に低いことが明らかになった。

次に「所属」との関連について、介護福祉系の学生とそれ以外に二分して分析した。第1因子「優越意識」と第2因子「スポーツ能力」で有意差が見られ、3学科のグループ間の比較では、第1因子の「優越意識」では、看護系の学生が介護・社会福祉系の2グループと比較して平均値が高いことがわかる。第2因子の「スポーツ能力」については、社会福祉系の学生の平均値が低く、介護福祉・看護系の学生の平均値が高いことがわかった。第3因子の「社交性」と第4因子の「寛容性」に有意差がなかったことについては、この因子は対人関係に関する項目が多いことで、特に今回は対人関係職に就くことを目指す学生に調査したことにより、有意差が無かったと考えられる。

続柄については、長男長女とそれ以外に二分し分析した。続柄においては、第1因子「優越意識」と第4因子「寛容性」に有意差が認められた。長男・長女の学生は、優越意識や寛容性の高得点者の割合が有意に高いことが明らかになった。

以上のことから、年齢は高年層になるほど自分に自信が付き、看護系の学生は、自分に自信があると回答した学生が多く、スポーツ能力に関しては、介護福祉系、看護の学生が高いことが明らかとなった。また続柄に関しては“長男・長女”の学生は学科別にみると介護福祉系・社会福祉系の学生が多く、「優越意識」や「寛容性」の高さに影響を与えられられる。

### 1.2.2 両親との関わりによる自我意識の相違

両親との関わりであるが、関わりを深いと浅いに二分し分析した。ここでは、母親との関わりが深い学生は第3因子の「社交性」と第4因子の「寛容性」に高い有意差がみられた。両親の性格については、気長と短気に二分し分析した。その結果、父親の性格については、第4因子「寛容性」に有意差が認められた。一方母親の性格については、全因子に有意差が認められた。性格との関連性については、父親、母親とも性格が“のんびり”“おだやか”という学生について、因子の高得点者の割合が有意に高いことが明らかになった。このことから、子どもの自我意識の形成には、親の関わりの深さと親の性格がおおらかなことが影響していると考えられる。また日頃から付き合いが長い母親の関わり方が、父親よりは影響力が高いと考える。

### 1.3 属性からみるいじめとの関連

次にいじめについてであるが、いじめること、いじめられること、いじめを見ること等を含めて体験したことがあると答えた学生は、7割にのぼった。また、いじめに対して、どのような立場であったかとの問いに対して、「傍観者」の割合が最も多く、ついで「被害者」という結果であった。6つのいじめの立場のうち、傍観者が最も多かったことについて森田・清永<sup>9)</sup>は、“この層（傍観者層）には大学進学を希望し、成績も比較的良い子が多い。いじめを見て見ぬふりをする傍観的態度と、受験戦争のルールを踏み外すまいとする安定志向とは無関係ではない”と述べ、一般的な大学生には、いじめの「傍観者」が多いことを指摘している。本研究の結果も森田・清永、香取の指摘と同様の結果となった。

また「いじめの影響」については、因子分析によって解析したところ「他者評価の過敏」「精神的強さ」「進路への影響」の3因子が得られた。

#### 1.3.1 所属学科といじめの影響の相違

この3因子と基本属性をみたところ、第3因子の「進路への影響」については、所属に有意差があることが認められた。所属については介護福祉系の学生とそれ以外に二分して分析した結果、介護福祉系の学生は低得点者の割合が高いことがわかった。3学科のグループ間の比較では、第3因子の「進路への影響」は、社会福祉系の学生が介護福祉・看護系の2グループと比較して平均値が高いことがわかる。また介護福祉系の学生の平均値は低い傾向にあった。つまり社会福祉系の学生は、いじめの影響により、「将来の職業選択に影響を与えた」「大学の志望学部に影響を与えた」という自我意識の要因となりうると言える。一方、介護福祉系の学生については、いじめの影響が介護の道へ進むと考えたことが直接的な要因ではないことが明らかとなった。

#### 1.3.2 両親との関わりといじめの影響

いじめの影響の自我意識と「両親」との関連について、第1因子の「他者評価の過敏」と第2因子の「精神的強さ」は母親の性格に有意差がみられ、どちらも母親の性格が気長な学生は「他者評価の過敏」「精神的強さ」の得点が有意に高いことが明らかになった。特に第2因子は「人間的に成長した」「精神的に強くなった」「人に思いやりをもって接するようになった」等、自我意識にプラスの影響を与える項目が多く、これは母親の、のんびりした気長な性格が、学生自身を支えていることが推察される。そしていじめの体験を通して、精神的に強くなることもあることがわかった。

### 1.4 属性及び因子と性格との関連

介護職に向いているとされる性格についてであるが、単純集計では、全体的に介護福祉士を目指している学生の割合がどの項目も4割近かった。これは、門野の研究結果にほぼ一致していると考えerことは妥当であろう。また性格と自我意識といじめの影響の因子間については、多くの項目に有意差がみられた。中でも「控えめででしゃばらない方だ」については、自我意識の第1因子「優越意識」第2因子「スポーツ能力」第3因子「社交性」で低得点者の割合の方が有意に高いことがわかった。

所属学科別にみると、介護福祉系の学生の割合が「じっとしていることを好む」について有意に高いことが明らかになった。これは特徴として「落ち着いている」ということで、人に対して落ち着きを払った対応ができると示唆される。また「優しく受容的な方だ」という項目に関しては7因子中、6因子に有意差が見られた。今回対象とした学生は対人関係職の仕事を選ぼうとしているため、どの

学科の学生にも“優しい”“受容的”という共通性があることがわかった。

## 2. 介護福祉系の学生の特徴

次に介護福祉士を目指す介護福祉系の学生の特徴について考察する。

伊藤<sup>10)</sup>の研究によると、介護福祉学科で学ぶ学生の基本属性については、続柄は第1子が多く、父親は公務員、母親は福祉・介護関連職であり、祖父母との同居は高いということであった。

今回の調査も近似しており、介護福祉系の学生の基本属性の特徴として、新卒の大学生が多く、第1子（長男・長女）が多く、祖父母とは同居しており、ほぼ毎日会っていることが明らかになった。また看護系の学生と比較すると母親の職業に有意差がみられ、介護福祉系の学生の母親の仕事が“福祉・介護職”の傾向があることがわかった。

自我意識については、「優越意識」が有意に低く、「スポーツ能力」が有意に高いことがわかった。「優越意識」は、「知的能力に自信がある」「自分に自信がある」「自分の生き方に自信がある」等、“自己肯定感”の高さが目立つ項目が多く、「優越意識」が低いということは、“自信性”や“自己評価”が低い傾向があると考えられる。しかしこれはSPI2と同様の結果となっており、門野は、「介護の業界ははっきりとした答えのない世界であり、強気で自分の主張を曲げない自信過剰なタイプでは利用者が安心して心を開くことができない」と少し弱気なくらいの方がこの業界に合っていると述べている。

心理学者のTomas Chamorro-Premuzic<sup>11)</sup>は「自信の低さ」について、自信が低いと現実的なリスク分析ができたり、もっと実力をつけようという動機付けになったりする、むしろ自信の低さは、将来の成功のために重要な役割を果たしてくれると述べている。つまり、自信の低さには環境適応の上で利点があり、損失を最小限に抑えるという役割があるとしている。そして、その「自信の低さ」は、他者中心であるからこそ、自分の実力を心配している傾向の現れで、他人の考え方を理解し、他人の立場でものを見ることができるとしている。

これらのことから、「自己評価の低さ」という自我意識は、デメリットのように捉えられがちであるが、人との関わりが多い介護現場で、自信の低さは他人に威圧感を与えず、人間関係を構築するのに役立ち、この後の介護の道を目指す学生が大きく成長する要因であると考えられる。また「社交性」と「寛容性」は他学科と比較しても有意差がなかったことから、介護福祉系の学生は、「社交性」「寛容性」を持ち合わせながら、他人のことを考えられ、人間関係の構築がスムーズにできる可能性を持ち合わせているという特徴が考えられる。

また特徴の一つとして「スポーツ能力」が高い傾向にある。介護は体力仕事であるとみえ、やはり体力に自信があることも、介護という進路を選択する要因となっているのではないかと考える。

いじめについては、いじめの体験は有るがその立場としては“傍観者”“観衆”の割合が高い。しかし、このいじめの体験が、介護の道へ進もうと考えたことには、直接的な要因ではないことが明らかとなった。

介護職に向いている性格について、他の所属学科と有意差が無かったことから、いわゆるSPI2による【慎重・繊細タイプ】と考えられるが、これは、他の対人関係職にも共通している。しかし、唯一有意差がみられたのは“じっとしていることを好む”という項目であった。これは、「じっと動か

ない」と捉えがちであるが、介護福祉系の学生の特徴として、スポーツ能力は高く、身体を動かすことについては苦でないと考えられることから、「精神的な面での落ち着きがある」と推察される。

以上のことから、介護福祉系の学生の特徴として、体力には自信はあるが、自己評価は低めである。しかし自信の低さがあるからこそ、慎重で落ち着いた傾向があり、自分よりも他人の事を考えられ、人間関係の構築がスムーズにできる可能性を持ち合わせていると解釈することができる。

## IV. 結論

### 1. 介護学生の自我意識について

介護職を目指す学生の自我意識の特徴としては、“自分に自信が無く、自己評価が低めである”“体力には自信があり、得意なスポーツがある”“慎重・繊細なタイプで、落ち着きがある”という傾向があることがわかった。しかし“自己評価の低さ”は、デメリットのように捉えられがちであるが、他人に威圧感を与えず、他人中心に物事を考えられ、人間関係の構築がスムーズにできる可能性を持ち合わせていると解釈することができる。

“自分に自信が無く、自己評価が低め”こそが、この後の介護を目指す学生が大きく成長する要因であると考えられる。このような自我意識の形成要因として、属性は第一子（長男・長女）が多く、祖父母との高い同居率、母親の仕事が“福祉・介護職”であり、母親の深い関わり方やのんびりした性格も影響していることが示唆された。“いじめ”に関しては、傍観者・観衆の立場が多い傾向がみられたが、このいじめの経験は、現在の進路には影響を及ぼしていないことも明らかになった。

尾崎<sup>12)</sup>は、実践の本質は“ゆらぎ”との直面であると述べている。なぜなら、人が「いかに生きるか」「どのように自己実現を目指すか」に関して「つねに正しい画一的な答え」は存在しないからということである。クライアントが自ら問題を克服する方法、方向も常に同じでなく、「正しい」と考えた方向に自己実現を目指しても、挫折を味わうことがある。さまざまな挫折や葛藤、社会の矛盾や変動と関わるなかで、援助者も迷い、悩み、葛藤する。これが社会福祉実践の本質である。このことから、「ゆらぐことのできる」余地や幅をもつためには、今回の研究結果である【自信の低さ】ということが介護福祉従事者には必要なかもしれないと考えた。

はっきりした自信も援助の上では必要ではあるが、「これでいいのだろうか」「どこかにまだ問題があるかもしれない」「大丈夫だろうか」という、“ゆらぐ”ことのできる力こそが、目の前の利用者との向き合い方・関わりを育て、それと同時に介護職員の成長・変化に繋がっていくのではないだろうか。

### 2. 介護学生に対する介護福祉士養成校での教育のあり方

この結果を踏まえ、介護福祉士の養成校ではどのような教育を展開していけばいいのだろうか。介護職を目指す学生の自我意識の特徴として、“自分に自信が無く、自己評価が低めである”ということである。そこでまずは、きちんと学生と向き合い、学生の自尊心を高めていくことが必要でないと考える。人は、受容された経験が無ければ、人を受容することはできない。大切にされた経験が無ければ、利用者を大切にすることがわからない。まず、その“できる”“受け止められる”という感覚

を持たせるといふ、地道な関わりが教員には求められる。

平成29年度のカリキュラム改正に向けて、養成校としてやるべき、教えるべき科目（人間力の向上、倫理など）を考慮し、選定する必要があるのではないだろうか。また、きちんと「介護とは何か」「介護＝世話ではない」という基本的な理論から人間の尊厳、自立支援を基本に知識・技術を科学的な根拠に基づいて、教育する。介護の仕事は、人の命や、生活を支える大切な仕事であることには変わらないので、エビデンスを基本としながら、“生きること”“人の暮らしを支えること”などを学生と一緒に確認していく作業を行うことが必要である。そこで、教員が諦めずに学生と向き合うことで、学生も自己受容し、自信に繋がっていくのではないかと考える。

### 3. 今後の課題

介護職を目指す学生の自我意識の特徴と影響を与えた要因を解明することを目的とし、対人関係職に就く社会福祉系と看護系の学生との比較を行なった。しかし、本研究では、特色のある学生と比較対象とした為、一般的な結果を得られなかった可能性がある。今後、一般の大学生との比較を行い、介護職を目指す学生の特徴を理解し、検討していく必要があり、今後の研究課題でもある。

また今後、介護職員の自我意識についても調査を行っていきたい。

### 謝辞

本研究にご協力いただきました、学生の皆様に深くお礼申し上げます。

### 引用・参考文献

- 1) 門野友彦. 新入職員の定着と戦力化における経営者の役割. 経営協2012; 4: 44-49
- 2) 李相済. 社会福祉施設における高齢者虐待についての一考察-職員配置基準に焦点をあてつつ-. 立命館産業社会論集2002; 37(4): 221-239
- 3) 山田昇, 橋本佳子. 老人福祉施設等における「不適切な介護」事例の発生要因と改善方策について. 佐野短期大学研究紀要2012; (23): 45-58
- 4) 李相済. 高齢者福祉施設における虐待に関する試論. 聖泉論叢2003; 11: 133-161
- 5) Karl Jaspers. Allgemeine Psychopathologie Ein Leitfaden Fur Studierende, Arzte Und Psychologen, Kessinger Publishing, 2009: 11
- 6) 山本真理子 他2人. 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究1982; 30(1): 64-68
- 7) 香取早苗. 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究. カウンセリング研究1998; 32(1): 1-13
- 8) 門野友彦. 新入職員の定着と戦力化における経営者の役割. 経営協2012; 4: 44-49
- 9) 森田洋次, 清永賢二. いじめ-教室の病. 東京: 金子書房, 1994: 88
- 10) 伊藤和子. 介護福祉学科で学ぶ学生の高齢者意識の実態と介護福祉教育の課題. 愛知江南短期大学紀要2006; 35: 59-84
- 11) Tomas Chamorro-Premuzic. 自信が無い人は一流になれる. 東京: PHP研究所, 2015: 58
- 12) 尾崎新編. 「ゆらぐ」ことのできる力-ゆらぎと社会福祉実践. 東京: 誠信書房, 1999: 8-10

## Factors affecting self-consciousness of care students

YAGI Yuko

### **Abstract**

[Objectives] The objective of this study is to understand the characteristics of self-consciousness of students who are learning to become professional care staff, and elucidate what kind of factors are influencing the development of their senses of selves.

[Methods] We conducted a questionnaire survey to four-year college students who aim to become certified care workers, and similarly person-to-person works of certified social workers and nurses, and received answers from 580 students.

[Result] The characteristics of students who are learning to become professional care staff included the following tendencies: “not being self-confident and having lower self-evaluation,” “being confident in their physical strength and good at particular sports” and “having discreet and sensitive personality and being calm.” As the formative factors of such sense of self, it was observed that more of them were first child of a family (first son or first daughter), and high percentage of living with their grandparents, their mothers works were social workers or care workers, and strong influence of their mothers as well as their own laid-back personalities.

[Conclusion] As the characteristics of self-consciousness of the care students, they were confident of their physical strengths, but their self-evaluations are relatively low. These traits may be considered to be negative, but could be understood that their ‘low self- evaluation’ are connected with their carefulness and calmness, and they may be able to think of others before themselves and to form human relationships smoothly. Their traits of “not being self-confident and having lower self-evaluation,” are thought to be the factors to allow the certified care workers-to-be students to grow big in the future.

**Keywords:** self-consciousness, self-evaluation, certified care workers